日蓮大聖人御書全集

月水御書（がっすいごしょ）

新版
1642
〜
1648

月水御書

文永元年('64) 4月17日　43歳　大学三郎の妻

伝え承る御消息の状に云わく「法華経を日ごとに一品ずつ、二十八日が間に一部をよみまいらせ候いしが、当時は薬王品の一品を毎日の所作にし候。ただ、もとのように一品ずつをよみまいらせ候べきやらん」と云々。

法華経は一日の所作に一部八巻二十八品、あるいは一巻、あるいは一品・一偈・一句・一字、あるいは題目ばかりを南無妙法蓮華経とただ一遍となえ、あるいはまた一期の間

にただ一度となえ、あるいはまた一期の間にただ一遍唱うるを聞いて随喜し、あるいはまた随喜する声を聞いて随喜し、これ体に五十展転して、末になりなば、志もうすくなり随喜の心の弱きこと、二・三歳の幼稚の者のはかなきがごとく、牛馬なんどの前後を弁えざるがごとくなりとも、他経を学する人の、利根にして智慧かしこく、舎利弗・目連・文殊・弥勒のごとくなる人の、諸経を胸の内にうかべて御坐しまさん人々の御功徳よりも勝れたること、百千万億倍なるべきよし、経文ならびに天台・妙楽の

六十巻の中に見え侍り。

されば、経文には「仏の智慧をもって多少を籌量すとも、その辺を得じ」と説かれて、仏の御智慧すら、この人の功徳をばしろしめさず。仏の御智慧のありがたさは、この三千大千世界に七日、もしは二七日なんどふる雨の数をだにもしろしめして御坐しまし候なるが、ただ法華経の一字を唱えたる人の功徳をのみ知ろしめさずと見えたり。いかにいわんや、我ら逆罪の凡夫の、この功徳をしり候いなんや。

しかりといえども、如来の滅後二千二百余年に及んで、五濁さかりになりて年久し。事にふれて、善なる事ありがたし。たとい善を作す人も、一の善に十の悪を造り重ねて、結句は小善につけて大悪を造り、心には大善を修したりという慢心を起こす世となれり。しかるに、如来の世に出でさせ給いて候いし国よりしては二十万里の山海をへだてて東によれる日域辺土の小島にうまれ、五障の雲厚うして三従のきずなにつながれ給える女人なんどの御身として、法華経を御信用候は、ありがたしなんどとも申すに限り

なく候。およそ一代聖教を披き見て、顕密二道を究め給えるようなる智者・学匠だにも、近来は法華経を捨てて念仏を申し候に、いかなる御宿善ありてか、この法華経を一偈一句もあそばす御身と生まれさせ給いけん。

されば、この御消息を拝し候えば、優曇華を見たる眼よりもめずらしく、一眼の亀の浮き木の穴に値えるよりも乏なきことかなと、心ばかりは有りがたき御事に思いまいらせ候あいだ、一言一点も随喜の言を加えて善根の余慶にもやとはげみ候えども、ただ恐らくは雲の月をかくし塵の

鏡(かがみ)をくもらすがごとく、短(みじか)く拙(つたな)き言(ことば)にて殊勝(しゅしょう)にめでたき御功徳(おんくどく)を申(もう)し隠(かく)しくもらすことにや候(そうろう)らんと、いたみ痛思(おも)い候(そうろう)ばかりなり。しかりといえども、貴命(きめい)黙もだすべきにあらず。一滴(いってき)を江海(こうかい)に加(くわ)え、爝火(しゃっか)を日月(にちがつ)にそえ添て、水(みず)をまし増、光(ひかり)を添(そ)うると思(おぼ)しめすべし。

まず、法華経(ほけきょう)と申(もう)すは、八巻(はちかん)・一巻(いっかん)・一品(いっぽん)・一偈(いちげ)・一句(いっく)、乃至(ないし)、題目(だいもく)を唱(とな)うるも、功徳(くどく)は同(おな)じことと思(おぼ)しめすべし。譬(たと)えば、大海(たいかい)の水(みず)は一滴(いってき)なれども、無量(むりょう)の江河(こうが)の水(みず)を納(おさ)めたり。如意宝珠(にょいほうしゅ)は一珠(いっしゅ)なれども、万宝(まんぽう)をふらす降。百千万億(ひゃくせんまんおく)の

滴珠もまたこれ同じ。法華経は一字も一つの滴珠のごとし。乃至万億の字も、また万億の滴珠のごとし。諸経・諸仏の一字・一名号は、江河の一滴の水、山海の一石のごとし。一滴に無量の水を備えず、一石に無数の石の徳をそなえもたず。もししからば、この法華経はいずれの品にても御坐しませ、ただ御信用の御坐しまさん品こそめずらしくは候え。

総じて、如来の聖教はいずれも妄語の御坐しますとは承り候わねども、再び仏教を勘えたるに、如来の金言の中にも大小・権実・顕密なんど申すこと、経文よ

り事起こって候。したがって、論師・人師の釈義にあらあら見えたり。詮を取って申さば、釈尊の五十余年の諸教の中に、先四十余年の説教はなおうたがわしく候ぞかし。仏自ら無量義経に「四十余年にはいまだ真実を顕さず」と申す経文、まのあたり説かせ給える故なり。法華経においては、仏自ら、一句の文字を「正直に方便を捨てて、ただ無上道を説くのみ」と定めさせ給いぬ。その上、多宝仏、大地より涌き出でさせ給いて「妙法華経は、皆これ真実なり」と証明を加え、十方の諸仏、皆法華経の

座にあつまりて、舌を出だして、法華経の文字は一字なりとも妄語なるまじきよし、助成をそえ給えり。譬えば、大王と后と長者等の一味同心に約束をなせるがごとし。

もし、法華経の一字をも唱えん男女等、十悪・五逆・四重等の無量の重業に引かれて悪道におつるならば、日月は東より出でさせ給わぬことはありとも、大地は反覆することはありとも、大海の潮はみちひぬことはありとも、破れたる石は合うとも、江河の水は大海に入らずとも、法華経を信じたる女人の世間の罪に引かれて悪道に堕つることはあ

るべからず。もし、法華経を信じたる女人、物をねたむ故、腹のあしきゆえ、貪欲の深きゆえなんどに引かれて悪道に堕つるならば、釈迦如来・多宝仏・十方の諸仏、無量曠劫よりこのかた持ち来り給える不妄語戒たちまちに破れて、調達が虚誑罪にも勝れ、瞿伽利が大妄語にも超えたらん。いかでか、しかるべきや。法華経を持つ人、憑もしく有りがたし。

ただし、一生が間、一悪をも犯さず、五戒・八戒・十戒・十善戒・二百五十戒・五百戒・無量の戒を持ち、一切経を

そらに浮かべ、一切の諸の仏菩薩を供養し、無量の善根を積つませ給うとも、法華経ばかりを御信用なく、また御信用はありとも、諸経・諸仏にも並べて思しめし、また並べて思しめさずとも他の善根をば隙なく行じて時々法華経を行じ、法華経を用いざる謗法の念仏者なんどにも語らいをなし、法華経を「末代の機に叶わず」と申す者を科とも思しめさずば、一期の間行じさせ給うところの無量の善根もたちまちにうせ、ならびに法華経の御功徳もしばらく隠れさせ給いて、阿鼻大城に堕ちさせ給わんこと、雨の空にと

どまらざるがごとく、峰の石の谷へころぶがごとしと思しめすべし。

十悪五逆を造れる者なれども、法華経に背くことなければ、往生・成仏は疑いなきことに侍り。一切経をたもち諸の仏菩薩を信じたる持戒の人なれども、法華経を用いることなければ、悪道に堕つること疑いなしと見えたり。予が愚見をもって近来の世間を見るに、多くは在家・出家、誹謗の者のみあり。

ただし御不審のこと、法華経はいずれの品も先に申しつ

るように愚かならねども、殊に二十八品の中に勝れてめでたきは方便品と寿量品にて侍り、余品は皆枝葉にて候なり。されば、常の御所作には、方便品の長行と寿量品の長行とを習い読ませ給い候え。また別に書き出だしてもあそばし候べく候。余の二十六品は、身に影の随い、玉に財の備わるがごとし。寿量品・方便品をよみ候えば、自然に余品はよみ候わねども備わり候なり。薬王品・提婆品は女人の成仏・往生を説かれて候品にては候えども、提婆品は方便品の枝葉、薬王品は方便品と寿量品の

枝葉にて候。されば、常にはこの方便品・寿量品の二品をあそばし候いて、余の品をば時々、御いとまのひまにあそばすべく候。

また御消息の状に云わく「日ごとに三度ずつ七つの文字を拝しまいらせ候ことと南無一乗妙典と一万遍申し候ことをば日ごとにし候が、例のことに成って候ほどは、御経をばよみまいらせ候わず、拝しまいらせ候ことも、一乗妙典と申し候ことも、そらにし候は苦しかるまじくや候らん。それも例の事の日数のほどは叶う

まじくや候らん。いく日ばかりにてよみまいらせ候わんずる」等云々。

この段は、一切の女人ごとの御不審に常に問わせ給い候御事にて侍り。また古も女人の御不審に付いて申したる人も多く候えども、一代聖教にさして説かれたるところのなきかの故に、証文分明に出だしたる人もおわせず。

日蓮、ほぼ聖教を見候にも、酒肉・五辛・婬事なんどのように不浄を分明に月日をさして禁めたるように

月水をいみたる経論をいまだ勘えず候なり。在世の時、多く盛んの女人尼になり仏法を行ぜしかども、月水の時と申して嫌われたることなし。これをもって推し量り侍るに、月水と申すものは外より来れる不浄にもあらず、ただ女人のくせ・かたわ、生死の種を継ぐべき理にや。また長病のようなるものなり。例せば、屎尿なんどは人の身より出ずれども、能く浄くなしぬれば、別にいみもなし。これ体に侍ることか。されば、印度・尸那なんどにも、いたくいむよしも聞こえず。

ただし、日本国は神国なり。この国の習いとして、仏菩薩の垂迹、不思議に経論にあいにぬことも多く侍るに、これをそむけば現に当罰あり。

委細に経論を勘え見るに、仏法の中に随方毘尼と申す戒の法門はこれに当たれり。この戒の心は、いとう事かけざることをば、少々仏教にたがうとも、その国の風俗に違うべからざるよし、仏一つの戒を説き給えり。この由を知らざる智者ども、「神は鬼神なれば敬うべからず」なんど申す強義を申して、多くの檀那を損ずることありと見え

て候なり。もししからば、この国の明神、多分はこの月水をいませ給えり。生をこの国にうけん人々は大いに忌み給うべきか。ただし、女人の日の所作は苦しかるべからずと覚え候か。

元より法華経を信ぜざるようなる人々が、経をいかにしても云いうとめんと思うが、さすがに、ただちに経を捨てよとは云いえずして、身の不浄なんどにつけて法華経を遠ざからしめんと思うほどに、また、不浄の時これを行ずれば経を愚かにしまいらするなんどおどして、罪を得させ

候(そうろう) なり。

このことをば一切御心得(いっさいおんこころえ)候(そうら)いて、月水(がっすい)の御時(おんとき)は、七日(しちにち)までもその気(け)の有(あ)らんほどは御経(おんきょう)をばよませ給(たま)わずして、暗(そら)に南無妙法蓮華経(なんみょうほうれんげきょう)と唱(となな)えさせ給(たま)い候(そうら)え。礼拝(らいはい)をも、経(きょう)に向(むか)かわせ給(たま)わずして拝(はい)せさせ給(たも)うべし。また不慮(ふりょ)に臨終(りんじゅう)なんどの近(ちか)づき候(そうら)わんには、魚鳥(ぎょちょう)なんどを服(ふく)せさせ給(たま)いても候(そうら)え、よみ(読)ぬべくば経(きょう)をもよみ(読)、および南無妙法蓮華経(なんみょうほうれんげきょう)とも唱(となな)えさせ給(たま)い候(そうろう)べし。また月水(がっすい)なんどは申(もう)すに及(およ)び候(そうら)わず。

また南無一乗妙典と唱えさせ給うこと、これ同じことには侍れども、天親菩薩・天台大師等の唱えさせ給い候いしがごとく、ただ南無妙法蓮華経と唱えさせ給うべきか。これ子細ありて、かくのごとくは申し候なり。あなかしこ、あなかしこ。

文永元年甲子四月十七日　　日蓮　花押

大学三郎殿御内御報